

## 白岩孝行『魚附林の地球環境学 親潮・オホーツク海を育むアムール川』 昭和堂、2011年

### あいだをつなぐ技

後藤正憲

子供の頃、親に毎月とってもらっていた雑誌のなかに、次のようなコーナーがあった。いくつかクイズの設問が並んでいて、別のスペースには記号が無作為に散らばっている。クイズに答えるごとに、問題と答えに対応する記号を線で結んでいくと、徐々に絵が浮かび上がるという仕組み。もしクイズに間違えて、正しくない記号どうしを結んでいくと、出来上がりはこんがらがった毛糸玉のようにしかならない。その代わり正しく問題に答えるならば、無作為に記号が散らばっているように見えた空間の中に、船やライオンなど、それまで隠されていたものの陽気な形が、くっきりと現れるようになっている。

白岩孝行氏の新著『魚附林の地球環境学』を読んでいて、あの子供のときに体験した新鮮な感動を思い出した。もちろん、子供だましのゲームとまったく次元が異なるのは言うまでもない。本書を読めば、それまで無秩序に存在するかに思っていた自然物のなかに、人が生活する上で重要な連鎖の鍵が見えてくる。

そもそも題名にある「魚附林」という聞きなれない言葉からして、本来なら互いに関係ないどころか、まったく正反対のように思っていた海と山の産物を結び合わせることによって、壮大な地球の営みを一語で簡潔に言い表したものである。海の環境を保全するための知恵として、実は日本に古くから伝わるものだというこの考え方については、本書の結末にさしかかる部分で展開される。

全部で13章から構成される本書は、大きく2つの部分に分けられる。そのうち大きめの前半10章までは、アムール川とオホーツク海を舞台として行われた研究プロジェクトについて扱っている。立案から立ち上げ、始動、実行、進展の経緯を経て結果にいたるまで、著者がリーダーとなって進められたプロジェクトの全貌が、順を追って明らかにされる。小さめの後半、残り3章では、プロジェクトを通して確かめられた「魚附林」の発想に基づいて、「アムール・オホーツクコンソーシアム」結成の経緯とその展望が述べられる。

開墾や伐採など、気候変動のもととなる陸地の人間活動と、漁獲量に現れる海洋生物の変動とのあいだにある因果関係を明らかにしたいという動機で始められたプロジェクトは、始めから2つの要因のあいだをつなぐことを至上の目的としていた。しかしあいだをつなぐといっても、いきなり両端を直接結びあわせるのではなく、それまでにいくつもの中間項が用意されている。

そのなかでは、まずアムール川とオホーツク海のつながりに注目される。魚のえさとなる植物プランクトンが光合成を行うときに鉄分が必要とされるが、従来この鉄は、主に偏西風に乗ってオホーツク海や親潮域に飛来する黄砂によって供給されると考えられていた。

しかしプロジェクトチームは、アムール川から海に流れて海氷の下に沈みこむ鉄を多く含んだ中層水が、潮汐の力で大陸棚の沖合いに流され、さらに海流に乗って外洋に出ることで鉄分を供給していることを、さまざまな計測データを集めながら突き止めていく。

このようにプロジェクトでは、鉄と植物プランクトンのようにマイクロの世界にあるものから、オホーツク海とアムール川のような地理上の空間にあるものまで、あらゆるスケールの中間項を取り上げて、ひとつひとつあいだをつないでいく。こうした地道な作業を追いながら、概念と現実とのあいだの隔たりが徐々に埋められていくのを実感できることが、この本ではひとつの醍醐味となっている。というのも、暗く冷たい氷の下を流れる海流など、私にとって（多くの一般読者にとってもそうだと思うが）三途の川の流れと同じくらい、目の前にある現実からかけ離れたものである。また化学の教科書に書かれた物質の分子構造は、教科書を閉じればいっぺんに世界から消えてしまう。しかし、これら概念にすぎなかったものが、「北太平洋中層水」や「フルボ酸鉄」という中間項として措定されることによって、がぜん現実の姿を帯びてくる。ただ頭の中で思い描くだけだったものが、しっかりとこの世界に根を下ろすのだ。読者は、それまでばらばらの点の集まりでしかなかったものがしっかりと線で結ばれることによって、ものの輪郭が浮かび上がってくるような、ちょっとした興奮を禁じえないだろう。

もうひとつの醍醐味は後半部分にある。5年という計画期間を満了し、これまで認識されてこなかった陸と海のつながりを立証するという当初の目的を達成した後、プロジェクトは終了する。「前に投げる」という語源どおり、「プロジェクト」は常に前に向かって進むことが求められるものであり、ひとつが終わればまた別のものに取りかからなくてはならない。しかし著者は、事実を知ることによって満足するのではなく、研究者としてできることは何かとを考えをつき進めた末に、「アムール・オホーツクコンソーシアム」を立ち上げる。この地域の環境を将来の世代に引き継ぐために、言語・文化・経済の境界を越えて共同研究の進めやすい環境を作ることを目的として結成されたコンソーシアムは、期間の限られたプロジェクトよりも息の長い活動を約束するものである。プロジェクトではさまざまなもののあいだをつなぐことによって研究成果が収められたのに対して、ここでは従来隔たりがちだった研究と実践とのあいだがつながられているのを、読者は見届けるだろう。

全編を通して、地球環境と人間の生き方・文化のあいだをつなぐというモットーに貫かれた本書は、あらゆる意味で「あいだをつなぐ技」の光る一冊となっている。そして何より、プロジェクトを実行したりコンソーシアムを立ち上げたりする上で、実際に費やされた膨大な人の苦労や努力と、読者とのあいだをつなぐのも、この一冊である。

後藤正憲（ごとう まさのり）

北海道大学スラブ研究センター助教。専門は文化人類学。研究テーマは、ヴォルガ中流域諸民族の宗教その他の文化的実践。